

聖書朗読 : ヨハネの手紙1の1章と2章

今朝は、礼拝を続ける前に、今読んだ箇所からいくつかの事柄に注意を促し、いつものように、私たちがいる現在の一般的な状況との関連付けを行い、そこからいくつかの応用を導き出すようにしたいと思うのです。新約聖書の長い文章なので、すぐに飛ばしてしまうかもしれませんし、あまり深く掘り下げられない部分もあることをお断りしておきます。しかし、願わくば、私たちはまだこの聖書箇所から得られる1つ2つの事柄を見つける事ができると思います。

しかし、その前に、これからお話しすることをよりよく理解するのに役立つようなイラストを紹介したいと思います。このイラストは、数週間前にインターネットである説教者の話を聞いているときに聞いたものですが、考える価値のあるものだと思います。新婚の夫婦、あるいは結婚してしばらく経った夫婦を想像してください。ある日、妻が夫に「家事で疲れているから、お皿洗いを手伝ってほしい」と頼みます。夫が「離婚の話ですか」と尋ねると、妻は「何を言っているんです、違いますよ」と答えた。夫は「では、私がやらなくても離婚しないのですか」と再度確認する。妻は「いや、皿洗いを手伝ってもらっただけでいい」という。すると夫は、「テレビでゲームが続いているから、皿洗いはしない」と断りました。またある日、妻が夫に「ゴミを出してください」と言うと、夫は「これは離婚の話ですか」と答えた。もちろん、妻は「そんなことはない」と言ったので、夫はまたもや拒否した。これがしばらく続きました。このカップルを見て、あなたはこの関係がいつまで続くと思いますか、あるいはどんな関係になると思いますか？まあ、その考えは保留にしておいて、後で考えることにしましょう。

さて、先程の聖書朗読箇所に戻ります。この箇所で何が起きているのかを理解するために、この手紙が書かれた背景を簡単に説明しましょう。この手紙を書いたヨハネは、イエスの十二弟子の一人で、他の使徒たちのように殺されなかった唯一の人です。ヨハネがこの手紙を書いたのは紀元90年代頃と推定され、この手紙を書いた当時のヨハネの年齢がわかります。このことは、福音書の初期から長い年月が経過し、ヨハネが以前のような変化を目の当たりにしていたことを示します。間違った教えがたくさん出回っていて、知識の浅いクリスチャンは本当に困惑していましたね。その頃、盛んに行われていたのが、グノーシス主義に基づく教えです。グノーシス主義者には、彼らの教えの中核をなすいくつかの信念がありました：

1. 悪は物理的な世界との接触から生じるので、イエスが本当に人間であったとは考えにくい。
2. 救われるとは、この世の生活への懸念から解放されることである。
3. 救いは道徳や他者への愛とは関係ない。

私たちは今日、これらの信念や教えを見て、簡単にその欠点を指摘することができるかもし

れません。しかし、昔はそう簡単にはいかなかったでしょう。一般人よりも高い精神性を持っていると主張する人たちの教えであり、また、その人たちは当時の知識人として扱われていたのです。さらに、真の神の言葉を十分に学んでいない、あるいは成熟していない人々を惑わすという事実を加えると、この間違っただけの教えが野火のように広がる可能性があることがわかります。

さて、なぜこのような間違っただけの教えを気にする必要があるのか、疑問に思われるかもしれませんが。しかし、この教えの核心を見れば、その理由がわかります。また、当時のクリスチャンに宛てたヨハネの手紙が、現代の私たちにも通じるものである理由もわかります。その教えの中心は、私たちがどのような生活を送るか、神との霊的な関係を分けて考えようというものです。救いの恩恵を受けながら好きなように生きたいという考え方は、今に始まったことではなく、今日でも多くの教えの中核をなしています。

ここでは、ヨハネの時代の教えが、今日よく目にする教えとどのように似ているのか、さらに詳しく見ていくことにしましょう。先ほども言ったように、これらの教えの核となる考え方は、私たちが送る人生と神との関係を分離することです。現代のキリスト教では、人々はキリストを自分の主であると同時に救い主でもあるというよりも、むしろ救い主として見ることを好みます。人々は福音の恵みの部分に宿ることを好み、福音が教える生き方に宿らないのです。エペソ 2:8-9 には、「8 あなたがたは恵みにより、信仰を通して救われたのです。それは、あなたがたの力によるのではなく、神の賜物です。9 行いによるものではありません。それは、誰も誇ることがないためです。(共同訳)」とあります。この節をはじめ、神の豊かな恵みについて語られている節が多いため、多くのクリスチャンの間で不評な言葉のひとつに「仕事」があります。私たちは救われたのだから何をやってもいいという考えです。これが行き過ぎて、キリスト自身が言及した神の戒めによって生きることの必要性を感じない人が多いほどです。

これと似ているのが、罪の概念です。今日読んだ、イエスが捧げた犠牲によって私たちが赦されたことを語る箇所や、キリストによる救いの結果、私たちの永遠を保証する他の多くの聖句は、多くの人にとって罪という概念を無意味なものにしています。キリストが過去も未来も含めて私たちの罪を赦してくださったという信念は、多くの人にとって、罪とは無縁の人生を送る動機となっています。罪なんてどうでもいいんです。私たちに対する神の愛には境界がないのですからと考えています。

この次の考え方は、これまで挙げた2つの考え方に比べて、よりシビアでないものです。必要最低限のキリスト教徒という考え方。都合の良い条件でキリスト教を実践するという考え方です。これは、冒頭の夫婦のイラストとよく似ています。救いのテーマと関係ないのであれば、どうでもいいことかもしれません。多く人は、必ずしもそう考えているわけではなく、自分の信念として捉えているわけでもないのに、実際にはそうしているのです。しかし、私たちが召された人生は、これだけではないのではないのでしょうか？

さて、これらのアイデア、特に最初の2つを見ると、あまり違和感がありませんよね？しかし、ヨハネが反論していた人たちともあまり変わりません。なぜなら、その核心は、私たちの通常の日常生活と、キリストにある生活とを切り離そうという考えだからです。

そうすると、戒律に従うということが、恵みの福音の中でどのように位置づけられるのか、という疑問が自然に湧いてきます。ガラテヤ人への手紙3章11節に、律法によって神と正しい関係になる人はいないと明記されているのなら、律法への従順という主題は、どうして福音と関係があるのでしょうか。しかし、よく考えてみると、恵みの福音と戒律への服従の間には、何らかの関係があるはずで、恵みによる救いと、私たちの生き方との間につながりがあります。結局のところ、この恵みの福音をもたらした同じイエスが、例えばヨハネの福音書15章全体に見られるように、戒律への従順について多くの時間を費やして語られたのです。全体像をより明確に把握するために、今日の聖書箇所に戻ってみましょう。

ヨハネの手紙1の1章の5節で、ヨハネはこう書いています：「わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。」。ヨハネは手紙の本文で、福音書の中で言及したヨハネ1:4-5の光に言及しています。即ち、「4 彼の中に命があり、その命は全人類の光であった。5 光は闇の中で輝き、闇はそれに打ち勝つことができなかった。」それはまた、創世記1章の天地創造の際に言及された光に遡る。聖書における光と闇の概念は、しばしば善と悪を表すために使われます。ですから、神の中に闇がない光として描かれることは、神の純粋さを表現しています。光があれば闇はありえないので、神の完全で正しい性質は光として表現される。ヤコブ1:17には、「あらゆる良い贈り物、完全な贈り物は、移り変わる影のように変わることはない天の光の父から下ってくる、上からのものです」とあります。ここでも、神の純粋さの完全性を表現しています。神の表現にいかなる形の闇もないことは、神の中に悪がないこと、罪がないことを物語っています。彼はすべて善であり、完全である。創世記1:31で彼が創造した世界を見るときにも、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。」とあり、神は絶対的な純粋さと善良さを扱われたことがわかります。

天が確立したことです。神様が光であることを、イエス様の証言によって証明したヨハネは、ヨハネ第一章6節で、私たちに最初の現実を突きつけています。もし、私たちが神との交わりを持っていると言いながら、暗闇の中で生活しているとしたら、私たちは言葉も行動も嘘をついていることとなります。神が光であることが善、正義、純潔を意味するとすれば、闇は明らかに罪を意味します。暗闇に生きるということは、キリストが地上での生活を通して私たちに示してくださった神の本質から外れて生きるということです。パウロは第2コリント6章14節で書いています。「不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。」このことは、光と闇の間には交

わりはありえないということを物語っています。同様に、暗闇の中の生活は、光である神と交わることはできません。

このように、神と結ばれ、交わるためには、私たちも光の中にいなければならないことがよくわかります。この箇所7節で、ヨハネは「しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。」と書いています。神との交わりは光の中を歩むかどうかにかかっているだけでなく、互いの真の交わりも、光の中にいるときにしか実現しません。

では、どうすればこの光の中に入れるのでしょうか。8節によれば、その第一歩は自分の罪を認めることである。ヨハネは8節で「もし私たちが罪がないと主張するなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにはないのです」と書いています。創世記3章に罪がこの世に生まれて以来、私たち人間の性質は堕落し、罪が私たちの自然な状態となっています。その結果、私たちの肉は、ガラテヤ5章17節に「肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているのです。あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。」。ローマ人への手紙3章23節には「すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、」とあり、この箇所10節には次のように書いてあるとおおりです。「もし私たちが罪を犯していないと主張するなら、私たちは彼を嘘つきと決めつけ、彼の言葉は私たちのうちにはありません」とあります。承認の次に来るものは？ 告白することです。

9節はとても人気のある節で、「もし私たちが自分の罪を告白するならば、主は忠実で正しい方ですから、私たちの罪を許し、すべての不義から私たちを清めてくださいます」と書かれています。罪の告白と悔い改めは、神が私たちを清め、暗闇から永遠の光へと導いてくださる手段なのです。箴言28章13節に「罪を隠す者は栄えず、告白して放棄する者は憐れみを見いだす」とあるように、悔い改めとは、告白に続く、古い道から立ち返ることです。要するに、神様が私たちを闇から光に導く過程では、私たちが罪人であることを受け入れ、その罪を告白し、罪の行為や生き方から神様に喜ばれる生き方へと立ち返ることが必要です。そしてこの時、私たちの生き方と神との霊的な関係や交わりとの間に関係があることがわかるのです。

この暗闇から光への浄化と贖罪のすべては、イエス様の犠牲の結果として可能であることを忘れてはいけません。先ほど読んだローマ人への手紙3章の24節には、「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」とあります。エペソ1:7にも「この方にあつて、私たちは神の恵みの富にふさわしく、その血による贖い、すなわち罪の赦しを得ています。これは、神の豊かな恵みによるものです。」と書かれています。しかし、キリストの働きは、十字架上で犠牲になったことだけにとどまらず、2章1

節には、キリストが今、私たちの弁護人として、私たちに代わって父に嘆願していると記されています。

その前に、これまで話してきたことを簡単に要約して、すべてがつながっていることを確認しましょう。まず、ヨハネがこの手紙を書いた背景として、当時流行していた間違った教えを正すためであったことを説明しました。そして、その教えと、現代の人々がキリスト教信仰に対して持っている教えや態度との間に、類似点があることを指摘しました。両者の教えの中心には、日常生活やライフスタイル全般を神との交わりから切り離すという、同じコンセプトがあります。これまでの話から、神はイエス・キリストを通して、私たちが古い人生の罪から清めてくださるということがわかります。そうであるならば、神は、私たちが浄化されたのと同じ生活を続けることを望んでおられないはずです。言い方を変えましょう。神は、私たちが清めたのと同じ生活様式や方法を続けることを望んでおられないのです。箴言 26 章 11 節にある「犬が吐いたものに戻るように、愚か者はその愚かさを繰り返す」という表現と同じで、昔のやり方に戻るのはいけません。

では、神様は私たちにどのような生き方を期待しているのでしょうか。それは、神様との結びつきと交わりのある人生です。では、神と結ばれるとはどういうことでしょうか。先に述べたように、神との結びつきや交わりを持つということは、私たちが光の中にいることを意味します。この光の中を歩むとは、神様の命令に従うことです。2 章 3 節で、ヨハネは「私たちは、彼の命令を守るなら、彼を知るようになったことを知る」と書いています。4 節では、「もし、神を知っていると言いながら、その命令を守らない人がいたら、その人はうそつきである」と書いています。つまり、神の命令に従わなければ、神を知っていると主張することも、神と結ばれている、あるいは交わりを持っていると主張することも、偽りであるということです。そして、ヨハネは 5 節で、神の命令に従う者こそ、神への愛が本当に完全なものとなった者であると書いています。

エペソ 2 章 8 節にある「私たちは信仰による恵みによって救われた」という有名な一節について、少し補足します。個人的には、この聖句には 2 つの部分があると思うのが好きです。まず、最初の部分は、私たちが知っているように、神の恵みによって完全に救われています。第二部では、私たちは信仰によって救いを受けていることがわかります。ヘブル人への手紙 11 章 1 節によると、信仰とは何でしょうか？ 私は、New Living Translation の表現が好きです。「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」。つまり、私たちがキリストに願っているこの新しい救われた人生において、私たちはすでにその証拠を示し始めることができるという意味です。つまり、私は罪人でしたが、今は赦されて救われたと信じているので、もう罪人のような生き方はしていません。罪を犯し続けることは、何も変わったと信じていないことを意味し、エペソ 2:8 の 2 番目の部分を満たしていないこととなります。ここで一言、注意が必要です。救いを得るのは、私たちが生きる正しい生活や、私たちの従順ではありません。救いは神からの贈り物であり、従順はこ

の贈り物に対する私たちの応答なのです。もう一度言います。救いは神からの贈り物であり、従順はこの贈り物に対する私たちの応答です。

さて、一節に戻ります。ヨハネは、従う人こそ、神への愛が本当に完全なものとなった人だ
と書いています。ここでヨハネは、神の命令に従うことと、神への愛を同一視しているの
です。イエスはヨハネ 14:21 で「わたしのいましめを心にいただいてこれを守る者は、わたし
を愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人
を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」そして、神の命令に従うとき、私たちは
神への最大の愛を示すことが容易に理解できるのです。そのヨハネ 14 章の 23 節で、イエス
は続けていわれた、「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。
そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人
と一緒に住むであろう」。このことは、これまで述べてきた交わりや結びつきをさらに強固
なものにしています。神の命令に従った結果、神との交わりを持つだけでなく、ヨハネ 15
章 14 節では、イエスはご自分の命令に従った私たちを友と呼んでいます。「私の命令に従う
なら、あなたは私の友である」。ヨハネによる福音書 2 章 6 節では、神との結びつきを主張
する人々のライフスタイルは、この地上でのイエスの生き方に倣うべきであると書いていま
す。

しかし、ちょっと待ってください。もし私たちが罪を犯したら、神の中に闇は存在しないの
で、もはや神との結びつきはないということでしょうか？いいえ、そうではありません。こ
こで、1 章 9 節から 2 章 1 節に戻ります。私たちが罪を告白するとき、神様はいつも私たち
を赦してくださいます。1 章 7 節には、私たちがあらゆる罪から「清める」と書かれていま
す。これは現在進行形であり、私たちは常に、常に清められ続けているということです。第
1 ヨハネ 3:8-9 も、神の子と罪について述べています。神の子とそうでない人との違いは、
神の子が決して罪を犯さないということではなく、神の子が習慣的な罪に溺れないというこ
とです。9 節には、神の子である者は誰一人として罪を犯し続けず、と書かれています。

多くのクリスチャンは、クリスチャンが罪を犯してもいいのかどうか、よく議論します。罪
を犯すと救いを失うのか、犯さないのか。このような質問に対する私の答えは、いつも、こ
れは間違った質問だ、というものです。私たちは、キリストとの旅路において、どれだけの
罪から逃れられるか、あるいはどの時点でそれが問題になるかを考えて出発するわけではあ
りません。私たちは、キリストを愛し、喜ばせることに集中するのです。確かに、私たちの
肉の弱さのために、私たちは時々落ちるかもしれませんが、私たちはキリストの血によって
洗われ、清められ、再び完全になることができるので、安心することができます。現実的な
観点から考えてみましょう。ドライブ旅行を計画するとき、何回事故が起きたら中止か、何
回パンクしたら中止かを考えて、計画を立てる人がどれだけいるだろうか？もちろん、これ
は無茶な話ですが、だからといって、旅行中に起こることを何とかするための準備をしない
わけではなく、ただ、これらが焦点になるわけではないのです。

の旅です。神との旅も同じです。私たちは、自分の欠点をカバーするために、神の恵みとキリストの血潮があることを知っていますが、欠点は私たちが本当に目指しているものでも、興味があるものでもありません。私たちは、神との歩みに興味があるのです。

早速ですが、最後のセクションに移ります。私たちは神の戒めについてよく話してきましたが、この戒めとは一体何なのでしょう？十戒なのか、それとも聖書に書かれているすべての命令なのか、その数は何百とありますが。実は、それらよりもずっとシンプルなもののなのです。マタイによる福音書 11 章 28～30 節で、イエス様がこう言われたのを覚えていますか。

「28 疲れている人、重荷を負っている人は、みな私のもとに来なさい。29 わたしの軛を負い、わたしから学びなさい。わたしは心優しく、謙遜な者だから、そうすれば、あなたがたは自分の魂の安息を得ることができる。30 わたしの軛は容易であり、わたしの荷は軽いからである」。ここで話している戒めについてもそうです。第 1 ヨハネ 2:7 で、ヨハネは、この命令は何も新しいものではなく、彼の手紙の読者がいつも知っているのと同じ命令であると述べています。しかし、8 節では、一転して、この命令は新しいものだと言っています。ヨハネは、イエスが教えたことよりも新しい命令を思いついたのでしょうか？ 実は、そうではありません。ヨハネによる福音書 13 章 34 節をさかのぼると、イエスは言われました「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」この新しい戒めは、ヨハネによる第 1 ヨハネ 2 章の 9-11 節で語られている新しい戒めと一致することがわかります。ヨハネ 15:12 「私の戒めはこれである。私があなただを愛するように、互いに愛し合いなさい」、ルカ 10:27 「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」、「隣人を自分のように愛しなさい」のように、互いに愛し合うことを命じる記述が多く見られる。

これまで、今日の箇所では、神への愛と互いへの愛という 2 種類の愛を見てきました。マタイ 22:34-40 にあるように、この二つは最大の戒めです。「34 イエスがサドカイ派の人々を黙らせたと聞いて、ファリサイ派の人々が集まった。35 そのうちの一人、律法の専門家が、この質問でイエスを試した：36 “先生、律法の中で最も大きな戒めはどれですか。37 イエスは答えた：『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』。38 これは第一の、そして最大の戒めである。39 また、第二の戒めもこれに似ている。『隣人を自分のように愛せ』。40 すべての律法と預言者は、この二つの戒めにかかっている。」この 2 つの戒めは、他の戒めをすでに満たしているのです。そして、よく見てみると、この 2 つの戒めは、すでにそうなっていることがわかります。十戒は二つに分けられません。前半は神に関する事、後半は隣人に関する事です。神を愛するなら、神以外の神々を拝まず、神の名をむやみに呼ばないことである。同胞を愛するなら、同胞を殺したり、同胞から盗んだりしない。つまり、愛の戒めを果たすことは、すでに他の戒めも果たすことになることがわかります。それだけでなく、神は愛であることを私たちは知っているので、愛の生活を送ることは神の本質を生きることです（第 1 ヨハネ 4:16）。

すべてを合わせると、神と一体となって生きるクリスチャンとして、私たちに何が期待されているかがよくわかります。従順であること、光の中を歩くこと、それらはすべて愛の心から来るものです。これこそ、クリスチャン生活の公然の秘密なのです。私たちの従順は、義務や律法主義的な考え方からではなく、むしろ愛の表現からくるものです。私たちと神との関係は、規則に基づいているのではなく、神への愛に基づいているのです。この愛こそが、私たちが神との個人的で親密な結びつきを持たせるものなのです。これこそ、神が私たちが救うときに私たちに呼びかけていることなのです。エレミヤ 31:33-34 は、神がこの関係において何を望んでおられるかについて、次のように語っています。

33 「これは私がイスラエルの民と結ぶ契約である。

その時以降に」と主は宣言される。

「わたしは彼らの心にわたしの掟を置く

を、彼らの心に書き記す。

私は彼らの神となる、

そして彼らはわたしの民となる。

34 もはや、彼らは隣人を教えることはない、

とか、『主を知れ』とか、互いに言い合う。

というのも、みんな私のことを知っているはずだからです、

最も小さいものから最も大きいものまで」

主は宣言される。

「わたしは彼らの悪を赦すから

そして、彼らの罪をもう思い出さない。」

私たちが愛する人のことをいつも考えているのと同じように、私たちの心には**神の霊**が宿っており、何をすべきかを教えてくれています。私たちは、完璧であるために次の戒律を探しながら生きているではありません。これこそ、律法の力からの解放であり、私たちは、律法を作り、律法を作った方によって直接導かれ、結果として、律法よりも偉大な存在となるのです。そして、神の霊は決して私たちが神の不興を買うように導くことはない知っているのです。

冒頭の夫婦の挿話に戻ります。今日の私たちのクリスチャン生活は、あの夫のようなものでしょうか。救いを保証してくれる最低限のことをするだけなのか、それとも神様を愛し、その愛に突き動かされて行動しているのでしょうか。今朝、私たちは自分の人生を吟味し、神への愛の状況を振り返ってみてほしい。神への愛が強くないために、私たちから奪ってしまうようなライフスタイルがあるのでしょうか？教会の中で、特に奉仕する人を必要としているミニストリーの中で、神への愛が私たちが十分に動機づけることができず、埋められない空白はないだろうか？私たちの周りには、私たちが助けることができる人々がいて、神への愛が私たちに手を貸すための一步を踏み出させる必要があるのでしょうか？神への愛があ

あなたの心を満たし、あなたの道を方向づけるようにしましょう。

今朝お話したことを、いくつかのポイントに絞って簡単にまとめてみます。

1. 神との交わりは、日常生活から完全に切り離されることはありません。むしろ、神との結びつきは、私たちが送る生活の中で明らかになるのです。
2. 神は光であり、神のうちに闇はない。
3. 神様の命令を守らないのに、神様との結合や交わりを主張することはできません。
4. 私たちは、自分の従順さによって救われるのではありません。むしろ、私たちは恵みによって、従順な生活へと救われるのです。
5. イエスは、私たちが清められ、赦される手段であり、私たちが倒れたときでも、いつも父と一緒に私たちのために弁護してくださるのです。
6. クリスチャンの従順は、律法主義的なものではなく、愛から生まれたものです。
7. クリスチャンの生活は、神への愛と互いへの愛によって特徴づけられます。

その前に、今日の箇所の主題を考え、イースターを前にして、人気のある賛美歌の歌詞を読みたいと思います（少なくとも本国では人気でした）。最初の節とサビだけ読んでみます：

イエスに満足する

イエス様で満足しています、
彼は私のために多くのことをしてくれました：
私を贖うために苦しんでくださったのです、
私を自由にするために死んでくださったのです。

繰り返して：

私は満足している、私は満足している、
イエス様で満足しています、
しかし、疑問が湧いてくる、
カルバリーを思い浮かべながら、
主人は私に満足しているのだろうか？

そしてそれが、今朝の私たちへの問いかけです。あなたの主人は、あなたに満足していますか？1ヨハネ3:18には、「子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか。」と書かれています。ですから、今朝の私の最後の質問は、あなたの神への愛は、あなたに何をさせようとしているのでしょうか？